

# Urban Design Lab. Magazine

2016.06.30 vol. 242 特集号



## 広がりにゆく想い

T H E P R I D E A S A P R O F E S S I O N A L .

北沢猛先生特集 第3弾

野原卓先生を訪ねて p.2  
北沢先生と横浜の都市デザイン p.8  
横浜交流まちあるき p.10

東京大学  
工学部都市工学科/  
工学系研究科都市工学専攻  
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

編集長：黒本剛史  
編集委員：富田晃史 中井雄太  
王誠凱 浜田愛 神谷安里沙  
田中雄大 中村慎吾 松田季詩子



野原 卓 (のはら たく)  
 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院准教授  
 東京都世田谷区出身  
 東京大学工学部都市工学科卒業・同専攻修士課程修了  
 2009年博士(工学)取得  
 2003年-2010年都市デザイン研究室助手

## 野原卓先生を訪ねて —北沢猛先生特集 第3弾—

The Interview of Assoc. Prof. Taku Nohara in Yokohama

- Special Feature: Prof. Takeru KITAZAWA #3 -

北沢猛先生特集は昨年度より始まった連続インタビュー企画。故北沢先生に縁のある方々をリレー形式で訪ね、その人物像に迫ります。鈴木先生、遠藤先生に続く第3弾の今回、文化祭真っ中で賑わう横浜国立大学の野原先生の元へお伺いしてきました。

(編集：M1 浜田・M1 神谷・M2 王)

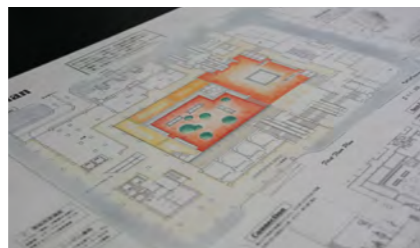
### - 都市工に入られた経緯を教えてください。

僕はもともと文1出身で、進振りでは理転枠を利用して都市工にきました。なので最初は建築をやるつもりはなかったのですが、教養時代の「東京のインフラストラクチャー」という授業で、社会基盤の篠原先生が駅舎のデザインの話をしていて、自分で設計して作ったものが世の中に残る素晴らしい仕事があるんだと感動して、その世界に行ってみようと思いました。進振りのときに、建築みたいな単体のものづくりよりは、まちみたいなものを作るのが楽しそうだと思います。それで都市工にきました。だから最初は周りに負けずに頑張らなきゃ、というがむしろな感じはありましたね。必死に泣きそうになりながら、皆さんと一緒に学部の2年間を過ごしました。

### - 野原先生と北沢先生との出会いは？

僕が大学4年生になった時に北沢先生

が横浜市から東大に先生として帰ってきました。僕もデザインにも都市にも関わる仕事がしたいと最初から思っていて、そして北沢先生は実際にそういうことを授業でやってくださる先生でした。これは僕がその頃の演習で作った図面です。



4年生の最初の課題はやっぱり横浜市にいらっやっしたので、横浜で。日本大通りにある「商工奨励館」という4階建ての保存した建物があります。ここを対象に、日本大通りの景観を考えるチームや商工奨励館の再生チームなど5班に分かれ、僕はこの敷地の設計課題を選びました。これでやった設計を北沢先生に、

なんかいいじゃん、って言われてその気になって、この世界にきました。本格的な出会いは多分ここでした。

### - 修士の頃はどのような学生生活を送られていましたか。

修士でも北沢先生と一緒にいれば単に設計でもないし単にまちの組み立てだけでもない、その間を一緒に考えながら空間とまさに計画と一緒に考えられると思って、何も迷わず都市デザイン研究室を選びました。修士は結構自由で、当時の研究室は大学院で十数人くらいの感じでした。今の研究室の皆さんも仲がいいと思いますが、昔はコンパクトで高い密度がありました。当時は9階の入り口に丹下研究室時代からずっと続く長机が、コピー機の前に一列に置かれていて、そこで研究室会議をしていました。プロジェクターをコピー機の上の壁に当て、今の8階の会議室みたいに30人でやる

## 本当にフラットな人で、表裏や分け隔てがない。人を取り込む力にかけては抜群でしたね。

ような規模ではなく、こぢんまりとしたアットホームな研究会でした。

### - デザ研で関わっていたPJについて

プロジェクトは北沢先生が来てから盛んになってきた感じでした。それまでもPJがなかったわけではないですが、チームという感じではなく、基本は先生と学生と一緒にやるのが主流でした。

僕の時は、福岡のアイランドシティという埋立地の住宅地部分を開発から守るために立ち上がったチームに、もう一人の同期と入って、その水辺をうまく生かした町のプランニングなどを皆で考えるプロジェクトをやりました。また、僕がいた頃に同時に岩手県を順番にめぐるプロジェクトが始まりました。大野村が一番有名だと思いますが、実はその前から、二戸とか九戸とか、何箇所かで1年ずつくらいで北沢先生と何人かの学生が提案をしていくという活動をやっていました。遠藤さんもやっていたはず。幾つかの地域に分割して、まとめて地域を考えていく久慈振興局という岩手県の部局があって、北沢先生はそこの人に頼まれ、順番に地域を巡って行きました。その際に八戸で講演をしていた時に、旧大野村の重役だった人が北沢先生を捕まえて、始まったのが大野村PJです。

### - 大学に戻られた経緯を教えてください。

修士を出て設計事務所に3年間勤めていたので、ちょうど喜多方や大野村が始まった頃は僕がいなかった時で、PJが盛んになり始めた頃に、研究室を一度離れました。働き始めて三年くらい経ったとき、次の展開として小さい事務所などに入りたいか思っていたので、たまに北沢先生に相談していました。ある時期

に北沢先生から電話がかかってきて、遠藤さんがアメリカで研究するので、人が一人減ったということ呼び戻されました。それは2003年の6月で、その月から北沢先生とある種学生じゃなくて同僚でもない、部下のような部下じゃないような、そんな立場と一緒に仕事することになりました。

### - 北沢先生と活動された3つのPJ(大野村・喜多方・京浜)について教えてください。

★大野村プロジェクト：これは当時人口6,000人くらい、今は、旧種市町と合併して、人口約2万弱の「洋野町」となった、旧「大野村」という村において、大きな村の全体計画を作るといって、その作った計画を元にしながら地域の人達と一緒にいるんなPJを起こしていくというのを組み立てているPJです。その5つの地区に毎年1年ずつ入って行ってその地区の計画を立て、そして計画を立てた次の年でそれを実行していくという形をとっていました。新領域創成科学研究科空間計画室で関わっている田村のPJのモデルはここにありますが。僕は最初の立ち上げ期から入ったわけじゃないですが、PJやってる途中から実際にいるんなものが動き出すことになっていたんで、遠藤さんの後任としてやりました。

北沢先生はもともと行政マンなので、やはり市とか自治体の経営や将来どうなっていくかをちゃんと考える仕組みとか人材とかが必要だと強く意識していました。じゃあ田舎の村で行政の人たちと一緒にいながら地域全体を魅力ある自治体に発展させるにはどうしたらいいかというときに、小さい単位で町の人と一緒に小さい計画を立てながらそれを実行していきつつ、その担い手を作っていく

という手法の仮説を実験していました。

北沢先生が1番テクニックとしてすごいのは、地元の活動やすでにある「事業」、あるいは、元々ある資源を見て、これが見えるんじゃないかっていうのを見抜くことでした。事業を全部やり直しにするのではなく、事業の中だけど上手い工夫をして組み立てていくことで、どうやって次に導けるようにするかということを考えていきました。それだけでなく、北沢先生は本当にフラットな人で、市長と喋った次に地元のおばあちゃんと普通にしゃべる、その態度がもう全然変わらないので、子供達とも一緒にいれる雰囲気でした。表裏や分け隔てがなく、人を取り込む力にかけては抜群でしたね。

★喜多方プロジェクト：喜多方は僕のいない2001年から始まっていて、最初4年間は北沢先生と直下学生でやっていたPJでした。だから最初は関わっていませんでしたが、ある年から補助金をしっかりもらえることになったので、手伝うことになりました。喜多方は現場の地域の実態を空間も含めてどういうふうにもマネジメントしていくかということに重きが置かれていました。報告書には「まちづくり提案」というまち全体の提案なんかも書いてはあるんですけど、どちらかというと、あるまちの部分の地域をどうよくするかという話を中心でした。

北沢先生は喜多方は4歳~14歳まで10年間住んでいた第2の故郷なので、すごく思い入れもあって、単にプランでどうするということだけではなく、本当にまちを愛していました。なんか小学校のころに書いた蔵の絵っていうのがこの本(「アーバンデザイナー北沢猛」)にあるんですけど、小学校時代からやはりまちを愛していたんですね。



旧大野村、地元の方との1枚



北沢先生少年期の喜多方の蔵の絵(「アーバンデザイナー北沢猛」より引用)



京浜臨海部シンポジウムの様子  
(2007年1月)

★京浜工業地帯：北沢先生は横浜市が第3の故郷といますか、14歳の時から市役所にも勤めてきたので、横浜市全体のあり方ももちろん考えていたわけですが、京浜はもっと大きいスケールの話です。日本や産業のあり方とか、都市の臨海部がどうなのかという話では、そういう横浜という圏域を超えた中で考えていく大きな計画として位置づけています。実は、北沢先生の中では、1990年代、都市デザインフォーラムで行った「アーバンリング展」の頃には、アイデアはでき始めていて、この後京浜工業地帯をとりまく海全体の臨海部を再生するあり方を模索し50年後の横浜を描く「海都(うみのみやこ) 構想横浜2059」、通称インナーハーバー構想と呼ばれる計画を作られました。

横浜の埠頭がだんだん必要なくなっていて、事前にその工業地帯の将来的な活用を考えておく必要があるということで、始めたのが京浜臨海のPJです。ただし、住民がほとんどおらず、市民とWSをする感じではなかったで、まずは研究としてやろうということになり、建築の先生も土木の先生も環境とか他の分野の人たちも一緒になって、多角的にこの京浜を見直していこうとしました。

実際に本当に何か動くところまで今でも行ききれてないんですが、こういう将来を見立てて都市の大きなあり方をきっちり考えていくというのが最近とかく失われがちなのです。常にはつくり続けられないにしても、そういう大きな都市のグランドビジョンみたいなものを、ある場面で、皆でもう一回見なおしたり考えなおすっていうのはすごく重要だと思っらっしゃったと思います。

3つの比較：ということで、スケールが

喜多方大野村京浜の順に違う、というのが構造的比較です。

- どうして野原先生は京浜を博論でやるうと決められたんですか。

近代の都市計画はきれいな住宅地をつくる計画で、産業革命があって密密した都市から逃げるのが最初のスタートでした。一方工業地帯っていうのは日本の都市計画の用途地域などにおいてむしろ端っこに追いやられる機能になっていて、工業地域の中の道路計画って意外とちゃんとやらないのです。だけど、いくら21世紀になったとはいえ、全部自給自足で生きるわけにはいかず、モノとの関わりは必ずあります。ということは、モノを作ってる人がどこかに必ずいるということですね。いくら無人化されたといっても全く全部が無人になることはなく、工業地帯の中で働いている人がいます。その働いている人は、住宅はともきれいな家に住んでるのに、働いている時にはもくもく煙の空気吸って働く環境でいいのでしょうか。そう考えると、一見都市から追いやられている、モノをつくる場所もあくまで都市の一部なので、ちゃんと一緒に考えていく必要があるのではないかと僕は思っています。なので、この京浜工業地帯のPJは、僕の中でもモチベーション高く北沢先生と一緒にやったPJでした。

この興味は結構都市の本質だと思ったし、工業地帯の研究ってほとんど誰もやっていないんですね。そういうこともあり、少し体系的に工業地帯やりたと思い、勉強しました。歩いて楽しいまちづくりとは無縁な感じで、ちょっと裏の仕事という感覚ももちましたが、大きい目で見た時には都市のあり方の中にちや

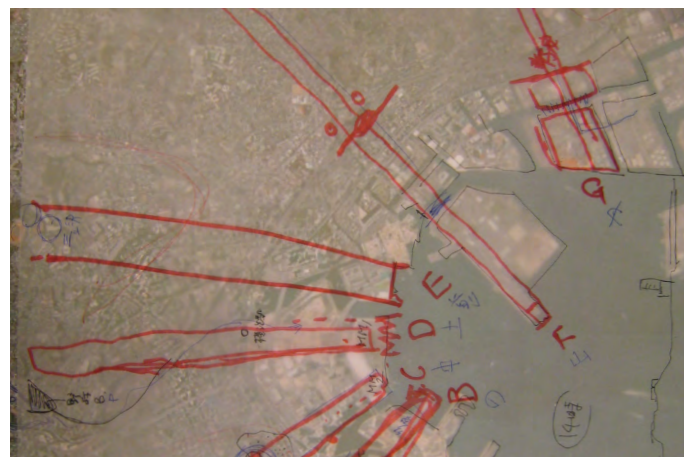
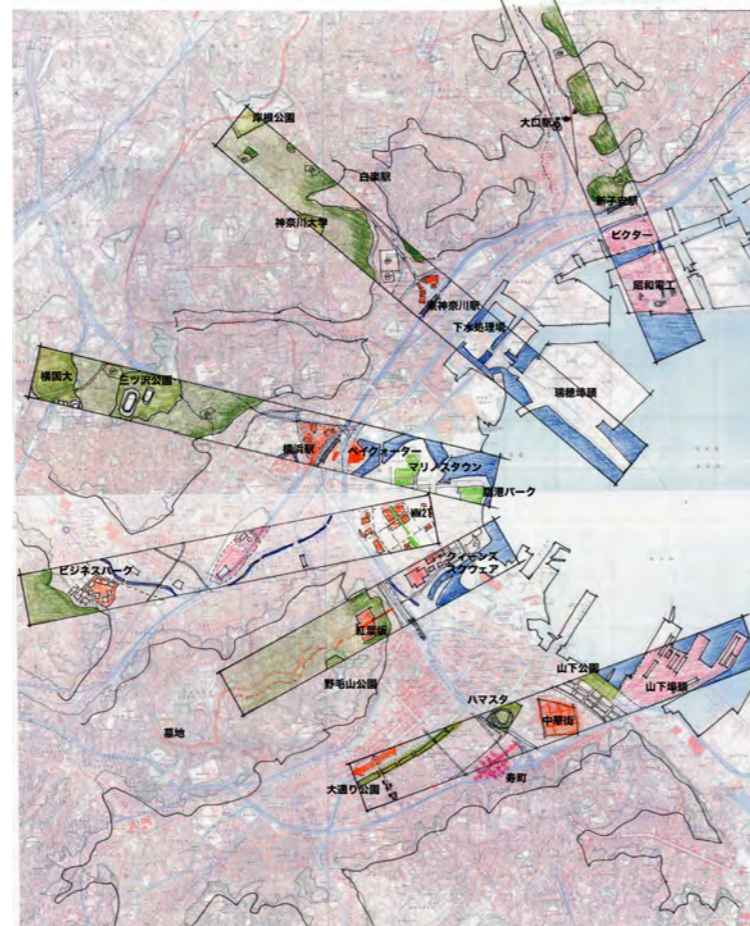
んとそういうものも位置づける必要があるのではないかと思います。それもあって今大田区でもっと小さいスケールでのづくりのPJを続けてやっています。

- 北沢先生がPJっていう形がいいんじゃないかと考え始めたきっかけは？

ずっと横浜市の職員として活動してこられたこともあり、都市をみていくときに、観念だけいじっていてもしょうがなく、実際の現場がどう動くか、コミットして行くことが大事だと思っらっしゃったと思います。建築家は世の中いっぱいいるけど、都市を設計して、それを実際の空間に落とし込んで実際の仕事にしていく、いける人材が世の中にあまりにいなさすぎると思っらんじゃないでしょうか。世の中は発注の仕組みで仕事になるかどうか決まっいて、必ず建築の設計か土木の設計か、何かに最後還元されちゃうんで、都市全体の設計をやる都市設計業務というのは可視化されないわけですね。唯一できるのは北沢先生の時代は行政だったんだと思っし、実はそれがだんだん変わってUDC (Urban Design Center) になったと思っいます。

一方で、現場は現場でそれしかやらないから、都市全体のあり方にそれが還元できない。それができるのは今度は研究者。ちゃんと一個一個の実践を吸い上げていくのが大学の役割なのです。北沢先生もどう吸い上げて、実践的な活動を理論化して理念化していくかというのをすごく大切にしたり、例えばさっきの大野村の話や田村に応用したのも、その自治体設計論みたいなものだと思うんです。最近のタクティカルアーバンリズムというのは、最初に起こすことに重点がお

都市を設計して、それを実際の空間に落とし込んで  
実際の仕事にしていく。していける人材を。





かれています。つまり、いきなり自治体全体の計画を考えるのではなく、そこで実際にイメージできる、市場やマーケットというイベントを仕掛けていき、これをどうしていくかを考えていく、その戦術論だと思うんですね。

という意味で、全体の戦術論をちゃんと組み立てていけないといけません。そこまで行き着く前に先生は亡くなってしまわれたと思うんですが、最後これを理論化して、都市の作り方をちゃんと考えようと言われていたと思うんです。こういうのはなかなか行政の職員にはできないので、やはり大学の立場と職員の立場みたいなのを上手くハイブリッドさせながらどういうことをやっていくかっていうのを考えた時にPJという形が、一番良いと思ったのでしょうか。

-アーバンデザインセンター(以下、UDC)構想もその延長線に出てきたんじゃないかなと？

そうだと思うんですね。だんだん開かれた世の中を作ろうとしても、単なる行政が主導して作るというものなかなかできない時代に到達していて、いろんな人達がちゃんと一斉に集まって、フラットな立場で皆が議論できるのが、ある種の理想形なんですね。だから企業、市民、行政とかその間が、変な固定化された立場じゃなくて、自分たちの本当に必要な

ものをそれぞれ出し合いながら協力できるっていう関係を作っていくにはどうしたらいいか、ということを考えてこの社会実験なんです。

僕らはUDCを100個つくれと言われていて、皆すごい苦労しています。それでも100個つくるのは、UDCと名乗ること、一つのネットワークができるからです。これは新しい、都市での職業づくりという意味があります。100個あれば100個の募集があり、職場があり、移動もできる。そうなってくるとある程度の人材が都市を仕事としていくことが出来るようになってきます。

現在の皆さんの就職を考えても、公務員・デベロッパー・設計事務所、都市コンサルなどになるかと思うのですが、どれもなかなか都市にうまくコミットできないか、お金にならないですよ(笑)。そういう意味で、行政が大事なんですけど、今の制度ではなかなか難しい。それをUDCという場所を通して、プロフェッションとしての都市への関わり方をきちんと作らなければいけないと思っただんじらないでしょうか。センターの名前をとにかく「UDC」にせよと言われてましたが、それは、人材の流動性を生むためでもあったと思います。

実際の現場で、本当によりよいまちづくりを進めてゆくには、やはり、空間や場所も大事であって、いざ、本当にいい空間や場所をつくるには、結局、専門性ある存在も協働しないと、皆の声だけ聞いたら良くなることも限らないですよ。そういうところを目利きしながら次の方向に導ける人材の育成が大切で、それがUDCかなって僕は勝手に思っているんです。

-UDCの理念が北沢先生が亡くなってから変わってきた部分があるのではないかなと思うのですが。

一方で、北沢先生は、あまり考えずに、とりあえずやってみるところもあって(笑)、まずは、UDCを初めて、その時点では、巧みなUDCマニュアルなどはできていないと思います。やってから考えてみようって、当初からそういう想定は無かったんじゃないかという気もするので、評価はしにくいですが、でも、UDC

会議ができるくらい数が増えてきたというのは、よい状況だと喜んでくださっているのではないのでしょうか。

実際皆全然違うし、もう別組織、別な仕組みがたくさんあります。それでもUDCの名のもとに集まって話し合う、そのことに価値を見出したと思うので。公民学連携を打ち出しているのも、色々な立場の人たちがそれぞれが意見を持ち寄って、でもそれを専門的に解いて、皆が集まれるプラットフォームづくりができれば、そこさえずれてなければ、細かい違いは地域ごとにあるよねという感じだと思います。

結局そうならないと時間をかけて巻き込むことはできない、あんまり理念が強すぎてしまうと、北沢先生のことを知らない人は入りにくいですよ。だから今の状況は、もし北沢先生がいらっしゃったら悲観すべき状況では全くなくて、むしろこういうことをきっかけにして都市のセンターみたいなものが広がっていくことそのものを喜んでいるのではないかなと思います。

-野原先生が北沢先生から引き継がれたものとは何ですか。

北沢先生から引き継いだものとして、物を広く捉えながらも実際のプロジェクトの中で何か巻き起こして現場できっちり成果を残しながら、それをもう一度還元して都市のあり方に戻すというサイクルと、そのサイクルをきちんと持ち続けるということは意識しています。僕は行政マン経験が一つもないので、行政の立場でどうできるか、どれだけ北沢先生について考えられるかは未知数ですが。

あとは、楽しくやることじゃないですかね。やっぱりやってる本人が楽しくないと聞いている方は楽しくないんじゃないかなと思うので、楽しくやっています。アプローチは様々でいいと思うんですけど、皆も楽しくやってほしいと思っています。都市自体を楽しいと思う心があれば、都市への愛着もあるし、おかしいことはおかしいと思えるようになります。それを実際に変えないとまちは変えられないんです。そこから自分の興味にしたがって制度や実際の設計の中に落とし込むことで皆都市に関わっていきます。そ

## 北沢先生は最後は都市デザイン学会を作り、都市デザインを学にしたいとおっしゃっていました。

のルーツである、楽しむことや、そこを良いと思っている原点を忘れないでほしいです。それを思えば北沢先生は常に楽しそうでした。つまらなそうにしていたのは見たことなかったです。その分ワーカホリックで家でも皆先生がマックに向かっての姿しか見たことなかったらしいです。仕事が趣味だったと思います。それぐらい楽しく都市に関わっていただけらしいなと思います。

-野原先生ご所属の「都市イノベーション学府建築都市文化専攻都市計画研究室」の位置づけを教えてください。

建築と土木と芸術系と、東大で言えば情報学環みたいな社会学の先生が集まっているのが都市イノベーション学府で、その中で僕らは建築。普通都市工は無いので、建築学科都市計画系という位置づけです。横浜が都市を勉強するには一番ふさわしいということで、都市をフィールドとして課題を考えるという意味で都市という言葉がついています。

それも、大学院では実践の演習をやっている、今年は関内が舞台です。地区をどうするか考え、リサーチと提案を行います。これは柏の葉のスタジオを参考にしている、単にスタジオで勉強するだけでなく、学生のアイデアを上手く巻き込み、このスタジオをプラットフォームにしながらまちづくりを進めていきます。そういうことも北沢先生を継承させていただいて、繋がっているかな、と位置づけています。

-都市デザインの立ち位置や役割と、展望や今後の論点を教えてください。

どうなんだろうね、どう思いますか？僕も意見が知りたいです。都市デザインって言葉は、一般にはとっつきにくいから、広まりにくくて、変えた方がいいのかは僕もいつも本当に悩みます。そこだけは北沢先生に聞きたいぐらいです。北沢先生は最後は都市デザイン学会を作り、都市デザインを学にしたいとおっしゃっていました。都市デザインという言葉が広いフォーマットだと捉えていたと思うんです。僕は北沢先生にお前は都市デザイナーと名刺に書けて言われていたように、北沢先生はプロフェッションだと思っていたんですよ。そしてその二世帯も皆都市デザインはプロフェッションだと、仕事になると思ってたと思うんです。でも30年ぐらいたってなかなか職能として形にできないのが歯がゆいところなんです。

だから都市デザインという言葉で包括するのがいいのか、新しく言葉でちょっと都市の枠を広げた方がいいのか、僕も今悩んでいて、わからないです。でも本当の想定されていた都市デザインという言葉はそういう限定された言葉じゃなくて、そのなかにマネジメントの概念は当時からすでに含まれていたし、都市をまさに大きく導くような調整するような、より良い方向に持っていく。(このうまい言葉が見つからないんです。)そういう意味での都市デザインはむしろ今必要だし求められていることです。

ただ、都市に関わる主体のあり方が多様化しているのも事実だと思います。建築家の人でそれに近い仕事をやり始めているひとや、実際にまちに関わってまちを良くしていこうとしているひとたち

も、結構出てきています。

その一つの答えを出すための実験が、UDCではあるんだけど、まだ残念ながらそこまでは確立していません。これから頑張ります、という話なので是非一緒に考えてください。そして今後も考えていきたいな、ということだと思います。

あと、海外を見ると全然違います。もう一度最近忘れがちな世界との関わりを見直してみるのも良いかなと思います。世界全体を捉えてみると、全然変わってきているし、全然違って考えられます。

-最後に、次の方を紹介してください。

信時正人さんですかね、やはり。都市工16回生でUDCヘッドクォーターとかUDC全体を統括する組織を作ろうとしている人です。北沢先生の元でUDCを作った張本人で、UDCを紐解く上ではよいのではと思います。学に関わらずということ。

\*

野原先生、この度はお忙しい中1日時間をとってくださり、貴重なお話と楽しく濃密な交流まちなるきを、誠にありがとうございました。

これまでの3名の方々のインタビューから北沢先生像の共通項が少しずつ浮き彫りになると同時に、その多様でいきいきとしたそれぞれの違いもまた、北沢先生のお人柄の魅力を伝えられているように感じました。

第4弾は、野原先生にご紹介いただいた信時正人様にお話を伺います。次回もどうぞご期待ください。■



物を広く捉えつつ実際の現場でしっかり成果を残し、それをもう一度還元して都市のあり方に戻すサイクルを持ち続けること。



# 北沢先生と横浜の都市デザイン

## Follow Prof.Kitazawa's Tracks in Yokohama.

アーバンデザイナー北沢猛先生を生み出したまち横浜と、北沢先生の関係性を紐解きます。  
(編集：M1 浜田、M2 王、M1 神谷)

### (横浜時代)

- 1977 東京大学工学部都市工学科卒業  
**横浜市企画調整局都市デザインチーム**
- 1978 郊外部歩行者空間検討調査
- 1979 区の魅力づくり基本調査
- 1980 横浜駅東口設計  
歴史的環境保全整備構想検討開始  
開港広場整備方針決定
- 1981 横浜駅東口駅前広場整備  
関内地区道路愛称標識 『港町横浜の都市形成史』
- 1982 開港広場整備(広場公園の初適用)  
金沢シーサイドタウン計画・デザイン調整  
歴史的環境保全整備構想  
新羽緑道計画
- 1983 関内駅南口広場設計 『都市デザイン白書』  
称名寺参道整備  
歴史資産調査実施 『都市の記憶・土木遺産編』
- 1984 夕照橋周辺整備  
金沢区歴史の道整備  
開港広場拡張整備
- 1985 水と緑のまちづくり基本構想策定  
磯子アベニュー整備計画
- 1986 アーバンデザイン研究体(UDM)発足・副会長  
夜景演出・ライトアップヨコハマ開始 『ある都市の  
れきしー横  
浜330年』
- 1987 エリスマン邸(山手西洋館)移築復元  
情報の道デザイン調整  
創造実験都市横浜会議「横浜都市デザイン宣言」
- 1988 ★歴史を生かしたまちづくり要綱制定  
横浜市歴史的資産調査会発足  
走川プロムナード整備  
第1回横浜アーバンデザイン国際コンペ  
横浜デザイン都市宣言 UDM通巻2号
- 1989 ★日本興亜馬車道ビル(旧日本火災横浜ビル)  
旧横浜船渠第2号ドック認定 『都市デザイン  
白書改訂版』  
都市デザイン交流宣言  
WS・横浜89実施(6大学と横浜市の共催)  
外交官の家移築復元方針
- 1990 パルセロナ&ヨコハマ シティ・クリエーション  
パルセロナ&ヨコハマ  
シティ・クリエーション記念学生建築設計競技  
国際都市創造会議  
山手まちづくり構想立案 UDM通巻3号  
川辺公園親水広場整備計画  
第2回横浜アーバンデザイン国際コンペ
- 1991 第3回横浜アーバンデザイン国際コンペ 『都市の記憶  
・近代建築編』  
ポートサイド水際公園設計コンペ
- 1992 ★ヨコハマ・アーバンリング展 UDM通巻4号  
第1回ヨコハマ都市デザインフォーラム
- 1993 イタリア山庭園・ブラフ18番館一般公開  
兼企画局技術管理課  
横浜建築局企画管理課  
(課長補佐)企画係長
- 1994 金沢ハイテクセンター・金沢広場  
横浜そ  
横浜 commons 策定の発想と展開』編著  
横浜建築局技術管理課  
都市デザイン室係長
- 1995 阪神淡路大震災応援業務  
長屋門公園(旧大岡家屋長門)  
旧第一銀行横浜支店曳家事業  
都市デザイン室長
- 1996 ★日本大通り再整備構想策定  
『都市の記憶・近代建築Ⅱ』

### 横浜都市デザインのテーマ (抜粋)

・新田→開港都市→貿易都市  
(日本大通、赤レンガ倉庫)

・関東大震災、横浜大空襲、米  
軍接収という3つの被災からの  
復興(山下公園、防火帯建築)

### 都市づくり構想(1960年代後半)

→3本柱の基本戦略  
・「コントロール」による法制度  
の整備  
・6大事業による「プロジェク  
ト」型の骨格づくり  
・アーバンデザイン手法による  
魅力ある良好な都市の形成

### 公共空間の整備(1960年代)

→行政主導で公共空間の即効的  
整備による都市空間の質の向  
上、周辺への景観誘導と調整

★くすのき広場  
インハウスによる整備

★日本大通り  
オープンカフェなどの仕組みづ  
くり

### 歴史を生かしたまちづくり (1970年代)

→横浜開港以来の歴史的建造物  
をまちづくりに活かす

★歴史を生かしたまちづくり要綱  
歴史的認定建造物認定による助成

★日本興亜馬車道ビル  
歴史的景観保全事業の認定第1号

### インナーハーバー構想(1992)

→内港の土地利用転換による  
リング状の都心空間の形成

★ヨコハマ・アーバンリング展  
8人の建築家・芸術家による  
21世紀都市の提案

★東京大学 COE「京浜臨海部  
再生アクションスタディ」

### 文化芸術創造都市構想(2004)

→歴史的建造物を活用した  
「創造界隈拠点」の形成

★BankART1929  
歴史的建造物の創造活動拠点活  
用及びアセットマネジメント

※参考文献  
・「アーバンデザイナー北沢猛」(BankART1929)  
・野原先生作成資料「横浜都市デザインの系譜と変遷」  
・横浜市資料「横浜の都市デザイン」

### (東大時代)

- 1997 東京大学大学院助教授  
外交官の家移築復元
- 1998 第2回ヨコハマ都市デザインフォーラム企画委員
- 1999 横浜まちづくり倶楽部副会長東京ビジョン研究会
- 2000 UDM・会長
- 2001 横浜元町第3期まちづくり基本計画
- 2002 横浜市参与  
横浜市文化芸術・観光振興による都心部  
活性化委員会委員長  
『明日の都市づくり』日端康雄・北沢猛編著  
『都市のデザインマネジメントー新しい  
公共体が再編するアメリカ諸都市』編著  
横浜市都市ビジョン研究会顧問  
横浜都心部における都心機能のあり方  
検討委員会副委員長
- 2004 横浜市(仮称)ナショナルアートパーク  
構想推進委員会委員長  
横浜市都市美対策審議会委員  
★BankART1929 オープン  
★東京大学 21世紀 COE「京浜臨海部再生ア  
クションスタディ」コーディネーター
- 2005 東京大学大学院教授
- 2006 NPO 法人アーバンデザイン研究体理事長  
日本土木学会デザイン賞特別賞  
(横浜市における一連の都市デザイン)  
横浜市創造都市横浜推進委員会副委員長  
舞鶴プロジェクト(舞鶴イーストハーバー  
構想策定委員長、赤れんがパーク、デザイ  
ン計画策定委員長)  
旧モーガン邸被災状況調査検討委員会  
(財)日本ナショナル・トラスト副委員長
- 2008 UDCY 横浜アーバンデザイン研究機構代表  
横浜市都心臨海部・インナーハーバー  
整備構想懇談会委員
- 2009 横浜市インナーハーバー検討委員会副委員長  
象の鼻パークオープン  
横浜クリエイティブシティ国際会議 2009  
アーバンデザインセンター会議

工学系研究科都市工学専攻都市デザイン研究室

新領域創成科学研究科社会文化環境専攻空間計画研究室



# 横浜交流まちあるき

Stroll through the Yokohama Minato Mirai 21 with YNU Students

この度、野原先生と横浜国立大学の学生さんたちにご案内いただき、横浜の都市デザインをたどるまちあるきを開催しました。都市デザイン研究室からは修士&博士の学生とOBが参加し、さらに横浜国立大学・都市計画研究室からも修士&学部の学生が大勢参加して下さったため、総勢約20名による大規模な、そして初めての(?)研究室交流まちあるきとなりました。都市デザイン研究室側の学生の中には横浜をあまりよく知らないメンバーも多かったため、また、慣れているメンバーにとっても詳しく説明していただけたので、非常に有意義なまちあるきになったかと思えます。

さて、横浜の都市デザインは前ページの通り非常に大きなビジョンの元で動いていますが、人間のスケールでは様々なデザインの工夫がなされています。そこで、今回は横浜を歩いてみて見えてきた横浜の姿をお送りします！(編集：M1 神谷)

### まちあるきの一日

横浜国立大学での野原先生取材後  
横浜の都市デザインをテーマとした  
まちあるきにかけました

▼改修後の野外音楽堂ではしゃぐメンバー  
どこも緑っぱいのキャンパスです



1 横浜国立大学着  
AM 10:30

取材では記事に書ききれないほど色々なエピソードをお話していただきました



2 野原先生取材  
AM 11:00

先生の学生時代の設計課題を見せていただきました(立面図がすごい)

みなとみらい駅で横国の学生さんたちと合流。総勢約20人で出発！ぞろぞろ歩く



3 みなとみらい駅  
PM 02:00

広い所で野原先生や横国生に場所について説明していただきます

### 創造界限拠点

歴史的建造物を利用した創造界限拠点です!!



▲万国橋 SOKO-②  
昔の倉庫をリノベーション。クリエイターやアートスクール等が活動する。建築家の山本理顕さんやセグウェイの事務所が入っています

▲Archishop Library & Cafe-⑥  
防火帯建築内の飯田善彦建築工房。1階はブックカフェ。学生は1回200円(飲み物付)。建築関連の本がたくさん!たまにイベントやってます

▲BUKATSUDO-①  
ランドマークタワー建設時にレンガを分解して再度組みなおされたドックヤードガーデン(三菱造船所跡地)。その中にある大人の日常を豊かにするためのシェアスペース。落ち着いた素敵な雰囲気です

▲横浜アイランドタワー (YCC 横浜創造都市センター)-③  
正面の部分は旧横浜銀行本店別館の一部を高層ビル建設時に曳家して組み込んだもの。この部分は普段はカフェですが現代アートスペースとして展示活動などが時々行われます。2階テラスでは北沢先生がよく煙草を吸っていたとか!?





改めて横浜のまちを歩くというとき、約4年住み慣れ親しんだ場所についていかに自分自身のことばで説明できないか再確認、刺激を頂くことができました。楽しい会話、きれいな街並み、美味しいビールとともに充実した休日となりました、ありがとうございます!!(横国 M1 森本舞香)

横浜に対して中華街と赤レンガと海という印象しかなかったため、横浜の都市デザインの蓄積を実際に体感できたことはとても勉強になりました。今回知った研究室の先輩の言葉や思いをしっかりと心に留めて、今後の大学院生活を過ごしたいと思います。(都市デザイン研 M1 田中雄大)

北沢先生の存在が都市工への玄関口だった私にとって、プロジェクト胎動期からの先生の足跡を修士メンバーと一緒にたどることができたことは、とても有意義かつ初心に立ち返る機会になりました。横浜国大の皆さんとは、北沢先生のDNAを共に受け継ぐ研究室として、今後もさまざまな機会に交流できたらと思っています。(都市デザイン研 D1 土井祥子)

▼防火帯建築の種類は様々。不規則なスパン、独特な色、etc. 個性が出ています!!



荘厳な外観の元 横浜正金銀行本店 ▶神奈川県立歴史博物館-④

▼ストリートファニチャーなどの細やかな意匠



低層部は、旧川崎銀行横浜支店の外壁。不思議な外観です

▼損保ジャパン日本興和横浜馬車道ビル-⑤



ベンチの整備は大変なので、「座ることができぬ柵」を設置



風が強い曇天の日でもゆっくりする人が大勢いました。普段はバランを広げます



時々現れる創造界限拠点や防火帯建築



4

まちづくり協定で建物・金具の色彩や照明や広告について細かく定めています。また、壁面後退してストリートファニチャーを用いるなど、人のために設えています



5

防火帯として明治時代に整備された、幅員約40mのこの通り。沿道のお店のファサード・広い歩道・座れる柵・オープンカフェなどが留まるための工夫がたくさん!



6 馬車道  
PM 04:30

懇親会 @ 関内  
PM 06:00



7

### 編集後記

神谷 安里沙

まちあるきの企画調整と案内をして下さった野原先生と横国の研究室のみなさん、そして社会人でありながら参加して下さいましたOBの高橋さん、中島さん。本当にありがとうございました。私が横国からこちらの研究室に進学して三か月が過ぎました。まちあるきの時は自分の立場がよくわからず、どちらの側にいるべきか行ったり来たりふらふらしてしまいましたが、徐々に横国の先生やみなさんと会えて嬉しかったです。同時に今回に備えて横浜について勉強した結果、横浜の大学にいたのに、横浜を歴史を含めて体系的に理解していなかったと気づかされましたが、新しいことを知る度に横浜は面白くなることも感じました。ただ、その魅力をまとめるのは非常に難しかったです。これからは、横浜に限りませんが、言葉やこういったマガジンなどで自分が感じる魅力をもっと上手く表現して発信していきたいと思っています。



URBANDESIGN  
LABORATORY